



Title	榎井縁さんインタビュー：居場所は場所ではない
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 26-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40497">https://hdl.handle.net/11094/40497</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

居場所は場所ではない



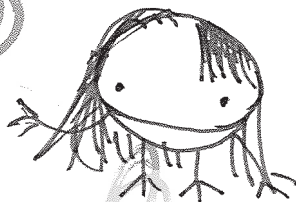
「たたかう国流」と呼ばれることもある公益財団法人とよなか国際交流協会は、その多彩な事業の中核の一つに居場所づくりを位置づけています。本インタビューでは、「居場所」に関心を持つ学生ふたりが、長年にわたって同協会を支えてこられた榎井縁さんといっしょに「居場所」を考えます。



大阪大学大学院文学研究科、臨床哲学研究室の院生で、  
ザイニチ。

2010年度より、主に外国にルーツをもつ子どもの居場所  
づくりのボランティアとしてとよなか国流で活動中。

えのり ゆかり  
榎井 縁 <sup>とん</sup> インビュー



横浜中華街の裏町生まれ。

小さい時は多様な子どもたちのなかで生きたために、人と違うことに違和感をもつ学校集団では強烈な排除を体験し、自己喪失感に長くつき合う。10代最後にフィリピンの草の根民衆運動に偶然に参加し、「社会構造」によって抑圧される“小さい人びと”の内なる力を知り解放の糸口を見つける。

大学卒業後は観光ビザでネパール王国に渡り、ソーシャルボランティアとして活動、帰国後その体験を元に「チベット難民児童奨学金」を設立、中学校教員をしながら、同NGOを現地チベット人教員と二十年以上運営。1990年入管法改定時には神奈川県国際交流協会で「かながわ国際識字プロジェクト」の事務局長をつとめ、被差別部落や在日朝鮮人など日本の非識字者を中心として第三世界のワーカー・支援者・関係者がつどう場をつくり、識字の現場を調査する。その中でニューカマーの問題に出会い、その後、大阪市教育委員会、とよなか国際交流協会などで外国にルーツをもつ女性や子どもとともに活動を重ねる。

現在は大阪大学未来戦略機構第五部門の特任准教授。日本で多文化共生社会をきり拓く理論と実践を、学生や教員とともに構築している。

大阪大学大学院人間科学研究科、  
社会環境学講座福祉社会論専攻。

いづつりょう  
井筒 玲



自立生活をしておられる障碍者のヘルパーとして活動してきた。豊中市内で、引きこもりの人などを中心とした居場所提供事業にも関わる。

**金** 居場所っていう言葉とか、居場所を作るとか、社会に居場所を作るとか、広くそういうことについて特集が組めたらなと思っています。

それで、僕も国流「とよなか国際交流協会のこと」ですつとボランティアをやってきましたが、事業の体系の中に居場所という言葉を入れて取り組んでるということもあって、榎井さんのお話は前から皆聞きたがっているというのがあって。だから今回ぜひこの機会にということで。

何から話せばいいかなってずっと思ってたんですけど、ひとつやっぱりもう一回聞きたいと思うのは、榎井さんがとよなか国流に関わりはじめたきっかけと、そのときどんな状況だったのかということと、そこからおおまかに、どんなふう

に榎井さんが仕事してこられたなかで、とよなかが変わってきたのかということ。



**榎井** 国流ができたときは大阪の市教委

で働いていて、豊中にすごいものが出来ると聴きました。二十年前に「地球市民を創る」って。地球市民。かつこいいじゃんって思ってた。それでワークシヨップという手法がまだ日本で普及していない時代に、どこもやってないようなワークシヨップを次々とやって。

**金** どんなのですか？

**榎井** 子どもの権利が批准されて間もなかったと思うのですが、それを国内で推進する人たちが関わっていましたね。子どもの権利って、頭じゃなくって、身体がほぐれないと大人はわかんないじゃないですか。でもワークシヨップって慣れない大人はなかなかできないし、市民権も得てなかった。

大阪市教委の教員の人權研修へ、とよなか国際交流協会の職員を講師に呼んで子どもの権利について考えるワークシヨップを初めてやったんです。当時の大阪市教委の先生たち——管理職に近い五十代の人たち八十人くらい集まったんですが、椅子から立たない。おっちゃん

たち。立ったりとか体を動かしたり、人と触れ合ってた話とかいう研修を一回も体験したこと無いから、頑なに立たない。みたいなあの時代に、それを私が覚えてるだけで月に三十回くらいガンガンやるってなんという不思議な場なんだろうと思っただけです。

ただ地域住民とのズレはあって。宇宙人が来たみたいな違和感。海外経験をした人たちが、英語などを使って留学生支援をするような国際交流が望まれていたのかもしれないです。

わたしは初代の人たちの直後にリクルートされたので、怒みやつらみが残っているように感じました。たぶん理想が先行したのでしょうね。その上その頃の行政の影響も強かったんで、予算を取ってくる、予算を消化することがダイジなんです。平等主義的に「あれもしますこれもします」という感じでした。一体何を大事にしたいのかわからないのが平等みたいな。豊中市は当時「人權」を政策に掲げており、国際交流協会もその傘下で設立されたのですが、男性性や権力性を持ち合わせた組織でもあったよう

す。

でなにか事業を変えるきっかけとして日本語教室に来ている外国人に、アンケートをしました。どうですか。ほとんど満足してますって回答でした。一番最後に「あなたは日本語をどこで一番使いますか」という質問があつて。その時の日本語教室は、専門の先生が安く効率よく日本語を教えてください二年で使える日本語を教える方針でした。いかに早く勉強して地域で日本語を使えるかを目標にしていた。でも、一番最後の回答、何だったと思いますか、どこで使ってたって質問。ほとんどの回答はセンター(ここ)って書いてあつたんです。

「ここです」って書いてある人は、地域で日本語を使っていない、使える相手がない。やるべきことは、話せる相手を探す方、日本語を教えるほうじゃなくって。日本語勉強しても使うところがここしか無いってことは友だちがいらないんだから、友だち——いわゆる日本人とか、普通に私たちが地域で会ってほしい人となと、ここで会わせないとって考えたんです。それで、九人いた先生に、「九

教室あるから、一つだけこちらでやりたい」と。皆さんのやり方はいい、やってください。すごい満足度が高いから。でも一個だけ、先生だけじゃなくて地域の日本人がごちゃごちゃいっぱい来そうなの日本語教室をやってみないと、相談をしたんです。

そしたら年度末ぎりぎりになつて九人が来て、「すいません榎井さん、全員やめさせてもらいます」って。寝耳に水状態になりました。つまり、一個つてなると、誰が辞めるのかっていうのが嫌だったというのが一つと、全員辞めたら困るだろって(笑)、そこではじめてあのとよなかにほんごっていう、今の形になつたんです。

なんていうか、優等生な外国人を創る装置としてのとよなか国流にだんだん気がついてきたわけですよ。海外でお世話になつた人がお世話してあげるという「やり方が」、非常に教育的だったりするわけです。南米の子どもは、コーラとか小さい時から普通に飲ませるじゃないですか。説教してましたね。当人にしたら習慣ですから余計なお世話ですよ。

それから、二〇〇一年にDV法ができて、DV相談が始まります。全国でいっせいに外国人のDV支援をするホットラインの日にちを決めました。関西でも幾つかの団体が協力して実施しました。医者や弁護士、通訳が一同会して相談電話を囲むわけです。でもかかってくるわけ無いじゃないですか。

そのとき協会は会場と、たまたま電話のラインが一個空いていたので、電話番号を提供したんです。相談日が終わった後から、ポツポツとDVの電話が掛かってくるようになって。必然的にDVの相談を始めないといけなくなつてしまつた。専門家がいなかったの、私と具さん「元職員の方」が一個ずつケーススタディをしながら手弁当のような形でやっていった。色んなケースがありましたね。一人、家族からの暴力で家に帰れないブラジル人のお母さんがいて。ブラジルで教育を受けてなくてポルトガル語の読み書きができない。世界が違うじゃないですか。文字の世界の人は抽象的な思考ができるので将来計画を立てることができるけれどそうじゃないと刹那的な

です。でも一生懸命で感情豊かで。毎日来るんです、でっかい荷物を持って。いくとこないから。毎日国流に来て、具さんとか気を使ってコーヒーを入れて、コーヒーを飲んで。エレベーターの前のタバコ吸えるところでタバコ吸って、散々泣くんです。ため息をついて、「はあー」って、帰っていく。で、また次の日来るんです。それが続くわけです。勿論相談されるので、こうしたらいいよとか、このためにはこういう風にしたらとか、あそこ行ったらとかアドバイスする。流石に数週間経って、何をやっても無理ということが解ってくる。

結局その人を矯正したいわけです、私たちは。ちゃんとしてあげたい。でもその人にとつて、欲しかったのは「ただい場所」だったんです。「こうしろあしろうって言われたくない。いられる場所がほしい」って。その時、アンラーンっていうか、ここは外国人の場所のように見せかけて、実はそうじゃないんだと。外国人を日本的に、私たちが思うように矯正して地域に送り出すみたいな場所だった。

なんでその人がいる場所がほしいって言ったか。いいいい場所がない。要するに有徴なんですよ。そういう人たちを作っている。一つだけすぐわかったのは、公的な——「公的」ってなに？って話になるけれども——少なくとも外国人は公的な場所からは排除されている。単に外国人がいていい場所なんて一つもない。多分公民館にもいけないだろうし、図書館でおじちゃんたちと一緒に新聞を広げることも出来ないだろうし、公園デビューも出来ないっていうのも知ってたし、っていうことが、それはどういうことなんだろう？って。その国流って、私がある間に、本当に周縁化されたりとかマイノリティとか女性とか子どもとかって言いながらも、本当にその人たちがいい場所になってるかどうかっていうのはやっぱりあって。いいいい場所ってこと自体をもうちょっと今は疑っているんだけど。まあそんなことかな。



**金** 僕が入った時にはそれなりに「いて

いい場所」の文化っていうのは出来たと思うんですよ。それも全然一筋縄では行ってなかったんやなっていうのは聞いて思っただけですけど。

**榎井** これもちよつと脇道に入ってしまったけれど、ふぁよんにとつてはすごい大きなことで。やっぱり在日の職員がいたってことは大きかった。在日の職員は、見えますからね。隠れられないっていうか。そこでやっぱり体張ったと思います、彼はある意味自己投射して、弁護していましたから。女性のことに關しても、さっきの彼女のことに関しても、含めて。一番話し聞いてたのは具さんですからね。相手してたのは。それはすごく大きくて。今は金さん「現事務局長の金相文さん」がいるんですけれど、やっぱりいることって大事なんですよ。

夏にあるセミナーがあつて、障害者差別法のことをずつとやってきて色んな裁判をやってきた弁護士さんが同席していて、私が在日の子どもたちの「いるのいないの、いないのにいる」話をしたら共感してくれました。これは私が外国人教



育の問題についてそういうフレーズを思いついたんです。もちろん「いる」。例えば学校の中に在日の子がいたとしても、いないように扱われる。あるいは、それを逆に言うと、もともと日本の学校なんだから、在日の子は「いない」はずだ、というところにいる。だから「いるのにいない」と「いないのにいる」は一緒なんです。その話をした時に、それはインクルージョンの、障碍を持つる子どもと全く一緒だと。いるのにいないとされる。いないはずなのにいるっていう。そこに隔離っていう話があるけれども、同じようなことが起こっているねっていう話でした。そこをおさえずに外国人の問題はできひんと思ってましたね。

在日の問題と、目の前の、「言葉ができない」「みたいな問題とを繋げないといけない」と思っていて。最近なんかこの、『レイシズム』『レイシズムスタディーズ序説』（鵜飼哲、酒井直樹、テッサ・モリス・スズキ、李孝徳共著、以文社、二〇一二年）にはまっつていて（笑）。これまさにそのことをずっと言っているんですが。結局つなげて考えないというの

は、為政者にとって非常にやりやすいって話なんだな。そっちに乗っかってるだけの話。結局それは何かと言ったら植民地主義だったりとかレイシズムであつたりとか。根っこはやっぱりそこにあるんだなっていう話ですね。

**金** とよなか国流のスタッフと、ある被差別部落だった地域で活動されている団体の方と一緒にフィールドワークをしたんですが、ちょうど被差別部落だとされるところとそうじゃないところの境界、団地と向かいにある道路のあいだにフェンスがあつて。そのフェンスは、もう昔の話なんだけれども、こっちは私たちのところだと、被差別部落の人たちとは違うんだということを証明するためにあつたフェンスで。もう取っ払ってもいいんだけどおたがいの対話なしに無理やり行政で取っ払ってもしやあないから、今まで残してるんですという話があつて。境界でこそ排除するというのがはつきり現れるんだけど、自分がすごく思ったのは、そこで対話がちゃんとなされて、やっぱりこれちゃんとはずさなあかんってなら

ないうちはそのまましておこうというのは結構だじやなという風に思つて。

いるのにいない／いないのにいるっていう話を聞いてちよつと思つたのはやっぱり、その人と話をあまりしないとか、その人をことさら自分とは違う存在にしてすこいつて思つたりとか、そういうこととつながつてると思いました。それは居場所がないということと関係するかなと思つたりするんですが。

**榎井** もうひとつ思っているのは、居場所、これはすごく言葉を選ばないといけないんですけれども、空間ではないって話なんです。

空間としての場所っていうのはすごく危なくて、さっきの話ですよ、どこまでが自分のものなのか。植民地も先住民もそうじゃないですか。場所を所有していくことによって、あぶれていくものが居場所を、逆の意味で居場所を探していくっていうときに、居場所っていうのは、なんていうんだらう、場所の所有のアンチテーゼというか。次元が違つていて、安心できるとか、いいとか、

どう言ったらいいかわからないんですけど、他者からの承認みたいなところが初めから剥奪されているなかで、それを取り戻すためにどういう風にしていったらいいのか、という一つの手段であつて。

マジョリティは居場所つて使わない。居場所つて場所を追われている人たちの、場所へのアンチテーゼみたいなイメージの場所。なので、空間じゃなくつて。場所じゃなくつて吹き溜まりみたいな。「お前いた！」みたいな積極的な承認ではなく、「いて当たり前だよね」、みたいな、対話がなされる。「いるのにいない」じゃなくつて「いるのにいる」みたいな。そういう……なんて言ったらいいんだろう、空間ではなく。頭のなかでいま整理ができてないんですけども。

**金** 僕自身が国流に吹き溜まつてるなどいうことをすごく思っていて。僕が関わっている「サンプルイス」の活動もボランティアとして子どものために居場所を確保しているんだみたいな、そういうことじゃ全然ないんですね。僕もそう

だし他のボランティアもそうで。どつちかというところと、子どもと一緒に遊んでるし、一緒に勉強してるし。そんな毎日毎日対話してるわけじゃないですけど、こぼれるつぶやきを拾って、それをどうにかできるわけじゃないけどボランティアとみんなで話し合つて悩むとか。そういうことをずっと、三年続けてきて。結局なんか、使命感みたいなものを第一の理由にして国流に行つてないんですよね、自分が。行きたいから行つてるし、そこにいる人たちに会いたいから行つてるし、人たちつていうのは子どももそうなんです。それは自分のそれまでのことを考えると、やっぱり場所がなかったな、という風には思ってますよね。

**榎井** その時の場所つていうのイメージが、やっぱり吹き溜まるというか、ちよつと絡むというか。色んな物に絡まれている自分がこうあるというか。空間としての場所ではなくつて、こういう子どもがいて、なんかちよつとこう自分が絡んでいて、それぞれ居場所つて一個じゃなくつて、全然違つて。たとえば

私はふぁよんと今しゃべりながら、ふぁよんはここにいな、つて。なんか、このへんにあのいるよね、みたいな。わかるでしょ？ この人はこのへんにいるよね、こつちいるよね、みたいな。だから、事業です、とか、国流はこういう組織です、とか言つたらもう絶対壊れちゃうみたいな。

でもそこにあるよね、何であるのかなつて言つたら、たぶん歴史だと思ふんですね。歴史と文化。それはたぶん、さっき言つた、DV被害者もそうだし具さんもそうだし。私もきつとアクターだつたと思うし。そこにできた、なんていうんでしょね、国流つていういわゆるプレイスとかいう場所ではなく、なんかその、ものが絡みそうなところ、みたいな。スポーツとか渦とか吹き溜まりとかいうか。そんなものがあるよねつていうのは、思えるかな。それはたぶん、色んな人たちの色んな思いが複雑に絡んで作つてきた、ひとつの文化みたいな感じが。

**井筒** 吹き溜まりつていうことばに、私



もすぐ共感をします。私は大学を出てから、いわゆる自立生活支援センターっていう、脳性マヒを中心に障碍をおっている人たちが、地域で活動するための支援をするNPOにいて。そこが、まあ吹き溜まりって言えば吹き溜まりだったんですよ。その設立をした方も、なんで設立したかって言ったら、地域の障碍者が溜まる場所が欲しかったからつくったと。

僕自身去年はそこで働く日が一日とか二日とか週にあったんですけど、それまでは基本的には直接在宅の人の家に行って帰ってくるという仕事をしてたんですよ。それはやっぱりきつかったんです。誰かとはいるんですけど、独りだなんて感じる時がすごく多かったですよね。で、その、皆が集まって飯食べて、外出活動するための計画を立てたり、次のイベントをする計画を立てたり、そういうことをやりながら、ほんとに何もしない時間もあって、そういうときは利用者さんとふたりでタバコ吸いながらはあみtain、昨日テレビどうだったみたいな話をしたりとか、恋愛相談をしたりとか、

しながら回っててっていう時間が楽しかったし、やっぱりすごく安定したんですよ、僕も。去年一年間ははつきり言って生活は厳しかったんですけど、そういう場所が確保されてただけで、すごい安定して楽しく過ごせたんですよ。

やっぱりそれっていろんな説明の仕方があるとおもうんですけど。僕は、やっぱりヘルパーではあるんですよ、当然その仕事はするんですが、ヘルパーとしての仕事はしてないですよ。友人であったりただ横にいる人として、ちよつとアレ取って、ちよつとトイレ行くから手伝って、タバコ吸うから外出きて、はいはい、っていう感じでやると。それは、なにか明確に何かやるのがあって、それを達成することじゃなくて、その場その場で起こったことに、流れに乗ると。それはほんとに、ヘルパーと利用者の関係のみがそうであるというわけじゃなくて、利用者同士もそうだし、ヘルパー同士もそうだしっていう、何をやってもいい空間で、楽しく日々を過ごすという場所がい救われる感じがしたなっていうのは

あって。

**榎井** なんかつぶん、居場所って場所のオルタナティブだと思っんですよ、絶対に。吹き溜まりって言ったんですけど、吹き溜まりのいいところは多分、なんて言うんでしょう、この人は何者とか聞かなくて済むとか、私は何者ですって言わなくて済むとか、ここに来たらこうしないといけないことがないとか。それってなんだろうって考えたら、そうじゃない関係っていうのは力が働いてたりとか、私はこういう者ですって仕事をしてないといけないとか。やっぱりそういうことから解放されるっていうのを、特に普段、力に無自覚の人は解放されないままにいつもの場所にいると思うけれども、そういうことに自覚的というか、それを感じざるをえない人たちにとっては、やっぱり必要な場所なのかなっていう感じがしますよね。

**金** サンプルに來ているある子どもは、最初センターに繋がったのは日本語だったけど、たまたまサンプルのボランティア

アと繋がるようになって。日本語も行きつつサンブレにも来るようになって。二〇一〇年に初めてやった「たぶんかミニとよなか」で、本格的に子どもと一緒に何かするっていうことを一緒に出来たと。そこからは毎週毎週、ボランティアよりも休みなくサンブレイスに来るようになって。そういうことを見ると、事業としてサンブレっていう場所を取り敢えず居場所づくりの活動って言っているけれど、サンブレが居場所なんじゃなくて、センタ―とか、とよなか国流の人たちっていう、もうちょっと大きい括りで居場所になってるんやと思うし、そういう風に子どもを色んな所につなげてみたりとかするっていうのを、僕は去年一年、仕事をみんなと一緒にやってみて、本当にそういうことに気を配って意識的にやってるんだなということは、よくわかったことなんですよね。



**金** 一方で、例えば今の日本語のボランティアさんの人たちとか、どこまで日本

語のその活動以外のところとつながっているのかというのは、結構難しいところがあるなと思って。だからこそ、哲学カフェとかさんかふえとか、そういうところを創ってみるっていうのは、子どもがそういう風に色んな所につながって、協会全体を居場所にしてくれている、っていうのと、またちょっと似てるといえるのか、さんかふえを通じて別の事業とか別の人のつながりが生まれたりするのかなっていう風に、今話を聞いててちょっと思ってたんですけど。どうですか？ さんかふえとかって、国流のなかではどんな風に位置づいていますか？

**榎井** 多分、今日本語事業の話をしたんだけれども、日本語事業はまず形から入っているの、形から脱出できないというか。だからモヤモヤとした、藻場みたいなところがほしいなっていうのがあって。

で、さんかふえみたいなのを創ると、「そこに来れる人が来る」のは、結構面白いって。混沌とした場作りっていうのは、ほそぼそとずっと続いていて。哲学

カフェもさんかふえも。そこをすごく大事に思ってる人たちがそれぞれ違っているっていうのがまたいいなって思ってますね。うん。やっぱりそこに、それを求めたりする人っていうのは、気がついていく人であって。いま、じゃあ日本語ボランティアに「さんかふえ出なよ」って言っても、義務になるという部分で。やっぱりこう、行きたいとか、居てたいとか、話したいなとかっていう人が、ぜんぜん違う部分から来る。どれだけそういうところを増やしていくかみたいなところが勝負なのかな、っていうのは、思いますね。

で、子どもはなんでそういう風に行ってるかっていったら、やっぱり、うん、その子たちがそれなりに乾いているから、だと思っくんです、乾いているっていうか、うん。まあ求めてるって言えば求めてるかもしれないし、乾いてるっちゃ乾いてるかもしれないし、奪われてるっちゃ奪われてる。



**榎井** 目的とか効果で測れないものがあるよねっていうふうになるには、誰が周縁化されていくのかっていう発想を、すごいもった時期があつて、で、そこからなんかこう、いろんなことを考えるようになった。

国際交流センターは役所の施設なんで、「きれい」でないといけないみたいなイメージ。でもわざと、古いものが貼つてあつて。マイノリティのグループが何かやつたとして、それをずっと飾つてくつていうことは、そこに居ていいっていうしるしだったりするわけ。そういう意味で、手垢をふかない、っていうか。柱の傷とかなんかそういうのをわざと残していく。センターの汚さというか、なんともいえない(笑)。なんかそういう、居ていいよみたいなメッセージっていうのがあるなかで、子ども事業が「効果は測れないよね」っていうところまできたのかなつて。それでいいと言い切れる文化ができていうのか。でも仕分けしたら一発、みたいな。ふふふふ。

うん、だからそういう意味での、なんかあそこ文化っていうのができてき

て、だからたぶん哲学カフェとかさんかふえとか、人数の問題ではぜんぜんなくつて、でもつづくよねっていうのが、私的にはすごくきもちがいいというのか。「これ国流でどういう意味があるの」とかつていわれると、うつ、て詰まりますけど。

**金** 説明しづらいっていうのがね。

**榎井** うん。でもなんかその……しづらのを、たくさんつくつちやつて、こちのものにしよう、みたいな(笑)。これが当たり前ですみたいなことをいえないちばん、いい。新事業があつてもいいけれどもやっぱそこにもつといっぱい、余白がないと、だめよね、みたいな。ただ、そればかりでは、どうしても説明の責任に答えられない。たとえば税金を使うときに、「いやー評価できないすよー」とか、「やーどうでもいいんですよ」とは言えないし。だからその外、肩のまわりに、すき間や余白をつくつていく。それをつくることで中も、すこし健全になるみたいなものなんじゃないか

な。今ある場とか今ある現実みたいなものに、やっぱり、へりとしてくつついていいる必要があるっていうか。

そこがないとたぶん、そのこの行き来もできなくなるというか。うん、たぶん、そこだけにいてもだめなときがやつて来る。そこにだけ居てもいいけれども、でもたぶんそこで力をためて、また、現実たとえば子どもだつたら学校という現実が、あるじゃないですか。現実としての学校や社会とかつていう仕組みは、やっぱり無視はできない。そこでやつていくために、そういうところが必要。とくに、社会的に力が無かつたりとか削がれてたりっていう子たちにとっては、ああこういうところが必要なんだなつて。

現実とか社会とかいわれてるとことは、まあ、なくならない。でもそのまわりに、なんかこう作っていくのは、もつともつと必要であつて、もつともつとそこで居ないとされている子たちが、なんとか落とされたパワーをもう一回もつてなるとか社会にしようよ、みたいなのはあつてもいいのかなと。障碍を持ってる人たちもたぶんそうだと思うし、介護

を必要としている人とか、徘徊する老人とかもそうだと思うけど、いわゆる社会的に居ないほうが楽とされている人たちが居るために、居続けるために必要な力、とか、安心感とか、居ていいんだとか自己肯定感とか承認とか、自尊でもいいんですけども。なんかそういう、なにかその、しくみが、居場所なのかなっていう。

金 うん……。そうですねなんかこう

……。うーん、出て行ってまた戻ってこれるっていうか。

榎井 うん！ 余白をずーっと旅しててもいいと思うんですよ、子どもとかね。どっかでなんか中入ってもいいし。そのまんま行ってもいいし。

でそういうなんか、その世界も認めてほしいっていうのがたぶん、居場所って言うんだと思うんです。いろんな人がたまり場をつくったとか居場所をつくったっていうのは、たぶん、そこを認めてほしいっていう何かがあるんだろな。でたぶん、中の人たちが、やっぱり変わってほしいって思うわけじゃないですか。

なので、対話が必要、ていうのが出てくるのかなっていう。



金 これ、訊こうか躊躇ってたんですけど……。

榎井 どうぞ。

金 とよなか国流っていうばしよは、榎井さんにとって、居心地のいい場所になつてたかな、とか。それかどっかにやっぱりほかの場、とか、あったのか……。

榎井 いや、他はなかったので、居心地がいいっちゃいいかもしれないけどなんか、すごいあそこは闘いの場だった。闘いの場っていうのは、「女」みたいなことを思い知らされたりとか、社会的な権力的なところと接点があつたりとか、市民からの突き上げがあつたりとか、外国人も仲良くなればなるほど、「あんたは日本で生まれてこんなんだし」みたいなものもあるし、自分がいろんな意味で確

認できた場所。居心地が悪くはなかった。自分の中のマジョリティ性とマイノリティ性がよく見えた場所です。つまり誰を前にして語るのかによって、まったく違う自分が見えてくる。でもよかったのかなあ。悪かったのかなあ。どういうのが居心地がいいっていうのは分からなくって、私の居心地のいいっていうのは、なんか、ずつといるんなことが考えられるとか、ずつとなんかこう怒<sup>い</sup>つてられるとか、ずつとけつこう闘<sup>い</sup>つてられるみたいなのが、いいのかもしれないって。社会がみえるとか世界がみえるというのはすごいおもしろかったですね。

あと私は、神奈川県出身なんで、同じような場所にしても、なんかその、こじんまりとしたよさっていうか。神奈川とか東京って相手がでつかすぎて、歯がたたないっていうか。ある一定自分が自分の足でいろんなことができたりっていう意味ではすごいとよなかおもしろかったですね。

役所からも、教育委員会からも、一目置かれてたりとか、発言権があつたりとか。そういう意味ですごくおもしろい

というか。なんかやつぱり、変な意味じゃなく人間で政治的なんだなって思いますね。たんに居場所だけをやってる、って人たぶんなくなってる対局、対抗するような勢力とか、主流とか、なにかあって、そこにアンチ的にやってると思うんですね。私にとつたら、このとよなかをやりながら、何が社会といわれているものなのかっていうのがすごくよく見えて、おもしろかったですね。

構築主義とか、カルチュラルスタディーズの人たちを呼んで「アンラーションシリーズ」を企画したときにぐわーっとのめり込んでそれといまの自分たちの置かれてる場所とか自分自身とかっていうのはわりとすつぱりあてはまっていきながら事業を展開していったのであんなふうになっただろうっていうかんじですね。だから、居てて、まあそういうなんか悔しいとかなんちゃらかいっっぱいあったけれども、居心地の悪いことはなかった。うん。充分におもしろかったですね。

それといっしょにほんとに現場の、子どもたち見て、頭を悩ませ。子ども事業

でできたいろんなこととかDV被害者の話とか、いっぱいおどろおどろしく現実はあるわけで。うん、その、なんのためにやってるかっていうあたりも、絶対ぶれないというか。あそこにいいたら。

なんか、ものがうまくいかなければいけないほど、おもしろいというか、これはほんとに社会だなあと。不条理なことがあればあるほどそうだなあと。

**井筒** 現場にいてることでぶれない……ばくもぶれなくなりました、いまでもないたいんですけど、やつぱりその、ぶれないためには場はあるなとずっと思ってる。ばくにとつては介護をずっとやっていくことがたぶんぶれないためにはすごい重要で。

何かとして型にはまらないっていう場が必要だよって話が出ていた一方で、自分自身としてはどこかでやつぱりぶれない、というか、なにかやりたいということはあるわけですね。

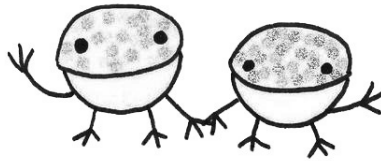
**榎井** うん、いやまさにそうだと思うんですね。

たぶん、子どもたちのパワーっていうのは、私は居るよっていうところに最後いくと思うんですね。学校の中に自分は居る。で、そこで、ぶれないっていうとおかしいけど、そこで自分が自分でありつづけられるために余白とか、居場所とか、うずまきとか、たまりばとか、吹き溜まりとかっていうのはたぶんあるべきなんだろうなっていうのは思っていて、もしかしたらその、これって現代的、近代的なことかもしれない。その辺は私はちゃんと勉強しないから分かんないけど。

**金** 自分が自分でありつづけるっていうのは、自分の矛盾っていうのに正直でいられるとか、なんかそういうことなんかなーと思って。ぶれないっていうのも、こう、何かをするために、なんか自分を抑圧してがんばるっていうのとはまた、なんか、ちがうかな、と……。

**榎井** うん、逆だと思う。逆だな。ぶれないっていうのは、自分、が、変わっててもいいんですよ。変わっててもいいけれども、「魂売らない」みたいな。

うん、あの、たぶん売りたいようになることが  
いっぱいある。あるじゃないですか。でも、  
いったいじゃあなんのためにやってんの、  
つていったときに、いろんな具体的な人の  
顔がちゃんと出て来るというか。やっぱり  
自分の生きてきたなかで出会った人、なん  
ですよ。社会問題という漠然としたもの  
があつてこれはおかしいとか言つてゐるわけ  
じゃなくて、なんであの子はあそこで死な  
ないといけなかつたのかとか、もう、もう  
ほんとに具体的に、そういう話、なんですよ。  
なんかそういうことちゃんと大事にしていける  
自分でいたいなつていうのすごい思います  
ね。



とよなか国際交流協会の様々な活動に関しては、ぜひホームページ  
(<http://www.a-atoms.info>) や Facebook ページ「とよなか国流」  
をご覧ください。

ちなみに、本インタビューに登場してくれたのは、とよなか国際交流  
協会のキャラクター、コモとスースです。実際に国際交流センターに  
行くと、いろんなコモとスースに会えますよ。



# インタビュー後記

今回のインタビューのお誘いを受けた時、テーマが「居場所」であると聞いて二つ返事で参加を了解したのは、そのときの私にとって「居場所」という言葉から想起されるものがいくらか鮮やかなものとしてあったからだった。そうであったはずなのに、その後改めて「居場所」について考えようとしても、不思議とあまり多くのことが思いつかない、ということがあった。その時は、なぜ自分がそうなのかが、よくわからなかった。／ただ今回のインタビューをとおして、この、私が「居場所」をあまり良く語れなかったことの原因がすこしわかったような気がする。それは、榎井さんと金くんにあって、私にはないものとして、インタビューのなかに、あらわれている。／お二人には、「私にとっての居場所」に加え、「あなたにとっての居場所」、「彼／彼女にとっての居場所」という視点と、居場所をつくる・まもるという意志と実践があったが、私にはそれらがなかった。言ってしまうえば、私には、「私にとっての居場所」を享受したという経験しかなかったのだ。居場所という場、あるいは状態の脆さや（字義通りの）有り難さを、単なる偶然的産物だとしか捉えてこなかったのである。たしかに「私にとっての居場所」というものをとおして、私は、自信やよろこびを受け取った経験はあった。しかしその鮮やかな感覚も、どこか、喉元すぎれば、という感じで色あせてしまったのだろう。このように、私の居場所という視点しか持ち得ないと、居場所を消費してしまう危険、というものがでてくるのかもしれない。／最近になって私も、居場所をつくる活動にいくつか参加するようになった。そのため、お二人が格闘しておられた居場所というものをその存在の特性に応じた形でいかに育むかという課題が、私にとっての課題にもなりつつある。おそらくこのことは、私に新しく居場所を語る言葉を与えてくれるだろう。そうなった時にまた、今回のようなお二人とお話ができる機会に恵まれれば、と願っている。（井筒）

このインタビューで、榎井さんが長年にわたってとよなか国際交流協会で実践されてきたことのエッセンスがお伝え出来たかと思います。／特に印象的なのは、「居場所は場所ではない」という言葉です。居場所をつくる・居場所になることは、場所の占有の問題ではなく、居場所とは承認の場であり、承認されることのうちに居場所はあるのです。とよなか国流が、センターを常に外国に繋がる人びとの承認の空間としてひらいてきたことが榎井さんの言葉には表れています。／また、「現実」の「肩」に余白を作っていくという発想も大切に感じます。「吹き溜まり」は「現実」から完全に分かれたものではなく、「現実」と自分自身との関係をとらえなおす場所、また継続的に力になり合える人間関係をつくる場所にもなるでしょう。生活時間の大部分を占める場所で生き延びるために、完全に切り離されないその「肩」に吹き溜まりが必要なのです。／余白をつくり維持することのたいへんさと、それでも長年「ブレない」活動を支えてこられた榎井さんのパワーが、インタビューから伝わってきます。そして、自分の「在日コリアン」ということにそれなりにこだわってきた私がこのインタビューでもらった元気は、今も私のどこかで脈打っています。（金）